

令和3年12月17日

国土交通省 中国地方整備局長

多田 智 殿

中国地方ダム等管理フォローアップ委員会

委員長

関根雅彦

殿ダム定期報告書の総括について

中国地方ダム等管理フォローアップ委員会は令和3年12月17日に殿ダムに関する定期報告の審議を行い、下記10名の意見により本フォローアップ委員会としての総括をとりまとめたので提出する。

記

氏 名	役 職	専門分野等
いのうえ たくや 井上 卓也	広島大学大学院 先進理工系科学研究科 准教授	河川工学
うみの てつや 海野 徹也	広島大学大学院 統合生命科学研究科 教授	魚 類
せいけ やすし 清家 泰	島根大学 研究・学術情報本部 エスチュアリー研究センター 客員教授	水 質
せきね まさひこ 関根 雅彦	山口大学大学院 創成科学研究科 教授	水 質
たばら ひろし 田原 博	日本野鳥の会 島根県支部 支部長	動物（鳥類）
つるさき のぶお 鶴崎 展巨	鳥取大学 名誉教授	動 物
なかごし のぶかず 中越 信和	広島大学 名誉教授	植 物
みわ ひろし 三輪 浩	鳥取大学 工学部 教授	河川工学
やまだ ともこ 山田 知子	比治山大学 現代文化学部 教授	社会環境
よしだ けいすけ 吉田 圭介	岡山大学大学院 環境生命科学研究科 准教授	河川工学

- 「第 32 回中国地方ダム等管理フォローアップ委員会」において、「殿ダム定期報告書」の審議を行った。
- 審議は、「防災操作、利水補給、堆砂、水質、生物、水源地域動態」の 6 項目について、平成 28 年度から令和 2 年度までの期間を主な対象として行った。

各項目に関する審議結果は以下の通りである。

1. 「防災操作」

評価期間である平成 28 年度から令和 2 年度の間、計 12 回の洪水が発生した。これらに対して必要な操作を行い、所期の機能を発揮している。今後も気候変動の影響によって、豪雨の頻発・激甚化が懸念されており、ダムの効果を最大限発揮できるよう、引き続き事前放流等の適切な運用を含む防災操作を行われたい。

2. 「利水補給」

所期の機能を発揮し、受益地に貢献している。今後もダムを適切に管理・運用し、ダム下流域への利水補給を行われたい。

3. 「堆砂」

管理上の問題は生じていない。今後も適切な方法により測量等を継続して実施し、堆砂状況を把握されたい。また、測量手法の違いや面的データの経年変化について分析・評価を行い、他のダムと共有されたい。

4. 「水質」

利水上の影響は生じていないが、アオコの発生が継続しており、今後水質障害が生じる可能性があることも考えられる。これらを考慮し、ダムの管理・運用に必要な水質や底質の調査を継続するとともに、巡視などの日常管理を通じて水質状況の把握を継続的に取り組まれたい。また、アオコ対策については殿ダムのアオコ発生メカニズムを詳細に把握するための調査・検討について計画的に取り組む、必要な対策を検討されたい。

5. 「生物」

生物の生息・生育環境に大きな変化は見られていないが、今後も調査を継続し生物の生息・生育環境の把握に努められたい。

保全対策については、今後は河川水辺の国勢調査等の調査に加え、日常的な維持管理を通じて効果の継続的な発現に取り組まれたい。また、保全対策で得られた知見について分析し、他のダムと共有されたい。

この他に、オオカワチシャ等の外来種対策は生息・生育範囲の拡大状況を巡視等の日常的な維持管理の中で確認し、必要に応じて適切な方法で駆除を実施されたい。

6. 「水源地域動態」

殿ダムが果たす治水や利水（発電含む）の役割について、ダム下流域への貢献状況が地域に理解されるような「ダム管理の見える化」を促進されたい。

また、ダムを活用した地域活性化の担い手の状況を考慮しながら、ダム周辺地域外との連携強化やダム周辺整備の利活用等について検討し、新型コロナウイルスにより停滞した地域活性化活動について再度推進されたい。

以上